
勇者物語

モノクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者物語

【Nコード】

N3886BA

【作者名】

モノクロ

【あらすじ】

現実世界から異世界に魔王討伐のための勇者として召喚されてしまった普通の男の物語である。

処女作なので変な部分もあるかもしれませんがご注意ください。

徐々に文章量を増やしていきます。

勇者物語？（前書き）

少しずつ書いていくので短いです。

勇者物語？

「おはよう、母さん」

俺の1日は、何時もこうやって始まる。

「おはよう、ユウ。早くご飯たべなさい、学校に遅れるわよ」

「はいはい。毎日毎日同じこと言わなくてもわかってるって」

これまでも毎日同じようなことを繰り返し、これからも繰り返されると俺は漠然と考えていた。

しかし、そんなことはなかった。

「ごちそうさま、母さんそれじゃあ学校いってくるよ」

「いってらっしゃい、忘れ物してない？」

「してないよ、じゃいってきます。」

そう、まさかドアを開けたら、光の塊のようなものに包まれるなんて想像すらしていない。

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

勇者物語？（前書き）

2話です。

前回より文章が増えております。

勇者物語？

光の塊が消えると周囲の光景は自分が見知ったものではなく、周囲には映画で見たことがある、【騎士甲冑を来た人たち】、【黒いフードを纏っている魔法使いのような人たち】、が自分を取り囲み正面には、騎士甲冑を来た人を左右に従え右手に【光輝く剣】を持ち金の髪に髪と同色の髭を生やし豪華絢爛な装飾を施した服を着た【王のような人】がいた。

「ここはどこですか？」

「ようこそ勇者よ、我が城へ」

「ゆ、勇者？だ誰がですか」

「それはお主のことだ。お主は魔王討伐するための勇者としてこの聖剣に選ばれここに召喚されたのだ」

【王のような人】が右手に持っていた【光輝く剣】を掲げた。
は？勇者？魔王討伐？聖剣？召喚？

意味がわからない、いや意味はわかるが理解したくないっ

「俺はただの高校生だ！勇者や魔王討伐ってどういうことだよ！？それに召喚されたって俺は家に帰れるのか！！説明しろよ！！」

「貴様っ！王に向かいそのような口を利いてもよいと思っっているのか！！不敬であるぞ！！」

【王のような人】の右に立っていた人が叫んだ

「良い、フェルム騎士団長。勇者は召喚されたばかりで戸惑っておるのだらう、勇者よお主の疑問は魔術師リルナに問うが良い」

「魔術師リルナ？」

「うむ、リルナは我が国でも屈指の実力者お主の疑問に全て答えてくれるだらう。話の続きはお主の身に起こったことを理解してからにしよう」【魔術師リルナ】その人なら何が起こっているか教えてくれるのか？

「その人は何処にいるん……」

その時、ゾクツと寒気を感じた。

騎士団長と呼ばれた女性が俺を睨んでいた。

「…ですか？」

「フェルム騎士団長に案内させよう、フェルム騎士団長構わぬな」

「了解しました。では勇者ついてこい」

そして、俺の前までやって来た。離れていたから解らなかったが、フェルム騎士団長と呼ばれた女性はとても綺麗だった。肩口で揃えられた銀色の髪に勝ち気な深緑の瞳その瞳に見られ、俺は見惚れていた

「何をしている、置いていくぞ」

「あ、ああわかった」

「では、勇者を魔術師の元まで案内して参ります。」

王がいた場所を出て騎士団長と共に歩き出した。騎士団長は俺のことを歩きながら見ていた。

「なんだよ」

「貴様のような剣を握ったこともないような者が勇者に選ばれるなど理解出来ぬと思ったただけだ」

「何で俺のこと何にも知らないのに剣を握ったことがないって解るんだよ」

「貴様の立ち振舞いを見ればわかる…貴様のような存在がなぜレンティスに選ばれたのか理解できぬな」

「レンティスって何だよ？」

「気になるならリルナに聞け、もうついたぞ」

「えっ」

気付けば目の前に木製の扉があった。

「リルナはこの中に入っている中に入り貴様の疑問を問うがいい」

「フェルムは入らないのかよ？」

名を呼んだ瞬間、首に剣を突きつけられた。

「な、なんだよ」

「ほう、剣を突きつけられて腰を抜かさぬか、大抵の奴なら腰を抜

かすか悲鳴をあげるものを、どうやら見込みはあるようだな」

「は？」

「一度しか言わぬからよく聞け我が名を呼んで良いのは私が認められた者のみだ。私の名を呼びたくば私に認めさせるのだな貴様のことを」

「わかったよ、あと俺の名前は貴様じゃなく「貴様の名に興味はない私に呼んでほしくば私に認めさせることだ」

「わかった。それで騎士団長は入らないのか？」「私は魔術師という奴らが好かん、力があるのは認めるが正々堂々と戦わぬからな」

「そうか、じゃあどうするんだ？」

「話が終わるまでここで待っている、早くいけ」そして俺は木製の扉を開けた。

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

勇者物語？（前書き）

？です。

少し量を増やしていきます。

勇者物語？

扉の向こうは、本だらけだった辺り一面本が山住になっている。

「魔術師のリルナさん？リルナさん！どこですかー！」
本の山の1部が崩れ声が聞こえてきた。

「はいい〜リルナはここですう〜手を貸してくださいい〜」
本の山から気が抜けるような間延びした声が助けを求めてきた、手が出てる方に俺は本を退けて手の元にたどり着きその手の主を山から引きずりだした。

その主は薄い紫色の長髪をして顔は髪に隠れて見えなかった。

「本に埋もれてどうしたんですか？」

「本を読んでたらあ〜いきなり本が崩れてきてえ〜埋もれたんですう〜ところでえ〜あなた確か勇者さんとして喚ばれた方ですよねえ〜」

「勇者になったつもりはないです。いきなり、お前は勇者だとか、魔王討伐しろだとか！言われても、意味がわからない！！」

「ふえ〜怒鳴らないで落ち着いてくださいい〜」「あつすみません、話してると自分に降りかかったことに腹が立ってしまつて、あれ？でもなんで俺が喚ばれたつてわかつたんですか？」

「ああ〜それはですねえ〜これのお陰なんですう〜」

そして彼女は本の中に手を入れて、手と同じ大きさの鏡を取り出した。

「これはですねえ〜持ち主が見たいと思つたあ〜光景を見せてくれるんですう〜さらにい〜声まで聞こえる優れものですう〜だからあなたがどうしてここに来たのかもわかつてますう〜」

「だったら、教えてください！俺は家に帰ることができるんですか
！！」

「すみません〜リルナにはあなたを帰す方法がわかりません〜」

「そ、それは…もう家に…帰れな〜いいえ〜帰れますよ」

「あなたは〜レンティスに喚ばれてえ〜ここに存在してるんです〜」

「それってどういうことですか？それに、レンティスって何ですか？」

「レンティスは聖剣です〜王さまがあ〜持ってたやつです〜」

俺は【王】が持ってた【光輝く剣】を思い出した

「あの光輝やいてた剣ですか？」

「やっぱり光って見えたんですかあ〜」

そのとき、彼女の薄い紫色の髪に隠れた瞳が見えた、彼女の髪と同じく薄い紫色をしてその瞳は喜びに満ちているようにかんじられた。「それってどういう？」

彼女は本の山を漁りある本を俺に満面の笑みを浮かべ差し出した。

「リルナ達には聖剣はただの綺麗な剣にしか見えませんよあ〜。この本【聖剣レンティスの伝説】のここ読んでみてくださいいい〜」

彼女はある一文を俺に指差して見せた。

「【聖剣レンティスに選ばれし者には聖剣の加護が与えられる】」

「これがその聖剣が輝やいて見えただけに関係あるんですか？」

「ありますよあ〜なぜならあ〜かつて存在した勇者は聖剣が輝いてた見えるとっていましたからあ〜」

「昔も勇者がいたのか！！？？」

「はいい〜いましたよあ〜」

「その勇者はどうなつたんだ！！？」

「わかりません〜記録では魔王討伐後に消えてしまっただけですからあ〜」

「消えた？元の世界に帰つたのか？」

「おそらく〜だからあなたも魔王を討伐すれば帰れますよあ〜」

「そ、そんなの無理だ！！俺はただの人間だぞっ！！」

俺はただの高校生の人間なのに魔王なんて倒せるわけない！

「違いますよあ〜あなたはこの世界においてはただの人間ではありませんよあ〜さらに聖剣の加護もありますしい〜」

「この世界ではただの人間じゃないってどういう意味だよ？それに加護があるって何でわかるんだ？」

「あなたは上位世界の人間ですからねえ。加護があるのがわかるのはこの【聖剣レンティスの伝説】が読めたからです。」だから意味が「まずはあゝ！！加護について説明しますねえ。それまでは疑問が有っても話が終わるまで黙っててくださいねえ。」

今の彼女には有無言わせね迫力があつた

「あゝああ。わかつた」俺の言葉を聞き彼女は満足そうに頷き、「では説明しますねえ。よく聞いてくださいよお。」

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886ba/>

勇者物語

2012年1月11日23時54分発行